

「この能力を知ったもの  
を操る」能力

るてにうむ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異能がある世界。その世界にある一つの学園。その学園の中に、奇妙で、そして真実  
味を持つて語られる一つの噂があつた。

『会長の異能を知ろうとした者は消される』、という。

目

次

生徒会長の異能  
消えたクラブ長  
謝罪とお願い

9 5 1



# 生徒会長の異能

「——よくここまで来たね」

その青年はニコニコとした顔で俺を出迎えた。特徴的なのは黒髪黒目の珍しい容姿だけ。顔も、言っちゃ悪いが普通レベルだ。

だが、そんなヤツがこの学園の生徒会長である、というのも変わらぬ事実である。「苦労したぜ、バルガさんよ！　生まれから通つた学校まで何から何まで不明だつた。名前すら本当か分からねえ！」

「そうなるようにしたからね」

変わらぬ笑みで、バルガは淡淡と告げる。こういういけ好かないヤツの秘密を暴き、白日の下にさらしたいというのが俺の行動原理だつた。

広報クラブ部長として、ゴシップネタを拾つては捨て拾つては捨て——だがいつまで経つても分からなかつたのは、この生徒会長の『異能』。

この世界では一定の割合で『異能持ち』が生まれることは周知の事実だ。そして、その中でも選ばれた者だけが通う事が出来る『学園』の存在も。

ほとんどの『異能持ち』はしようもない能力だ。2、3日後の天気を30パーセン

トの確率で当てることが出来る、とか消毒液を水に変えられるとか……そういう詰まらないものばかり。

だが、この学園の生徒たちは違う。火を操るとか、雷を作り出せるとか、時間を止めるとか——そういう『とんでもない異能』が集まっているのだ。

そして大体の生徒の異能は周知されている。というか、自然とそうなる。

学園内で異能の危険性を図る定期検査。一年に一度の異能使用可の勝ち上がりの大會。

そういう場か、もしくは隠すことに耐えきれず言い出すなどでの学園内では全ての人間の異能が大まかには知られている。

何度も言うように、この生徒会長の異能以外。

「けどここまで来たぜ！ 学園に入る際に必要な『異能証明』!! その保管場所を突き当てた!!」

「うん、結構厳重に管理してた筈なんだけどね」

「そりゃあもう、全力で調べたからな」

関係者への聞き取りにちょっとしたハツキング。やれることは全部やつた。

「ただ、来たらお前がいるのは予想外だつたけどな」

「まあ、こっちにもツテがあつてね。僕のことを熱心に調べてる生徒がいる事、その動向

……それくらいは気にしてるさ」

そう言うと、バルガは後ろの棚から1冊の本を取り出す。そして、こちらへ放り投げた。

「つと……なんのつもりだ?」

投げられたそれを危なげなく受け取つた。下調べで位置は把握しているから予想は付く。だが、改めて確認すると俺は眉を潜めた。

『異能帳簿』——学園が管理する異能証明が記載された本。何故わざわざ渡すのか。疑問の視線を投げかける。

「そこの143ページに僕についてのことが書いてある。今回に限つては許可するから、一度読んでみるといい」

「……訳がわからんねえが……まあ、見せてくれるつてなら遠慮せずに見せて貰うぞ」

そして、ページを捲る。120、130、140……こら辺、が……。

「……いや、おい。どういうことだよ。これ。……おかしいだろ」

目に入つたのは、それはもうおかしなページだつた。顔写真しか普通なのがない。滅茶苦茶だ。滅茶苦茶だつた。

「そうだね。そうなるようにしたからね」

分からぬ。この学園に入るにあたつて必須の項目が、この生徒会長のものだけ支離

滅裂だつた。

「うん。それでなんだけど、それを踏まえて言うと、僕の異能は『この能力を知ったものを操る』能力だよ」

「——……は？」

今、とんでもない言葉が聞こえた気がする。『この異能を知つたものを操る』？ それ  
は——。

「——それで頼みがあるんだけど、消えてくれないかな？」

# 消えたクラブ長

薄暗い部屋には、4人の人間が集まっていた。いつもなら6人でいたはずのその部屋には、あるべき活気すらなかつた。

最初に会話を切り出したのは青髪の男。

「……おい、聞いたか？」

隣の男子生徒はそれにビクリと震えると、ゆっくりと口を開く。

「ああ……クラブ長、昨日から音沙汰ないって……」

「……ねえ、マズいんじやない？ 別にあんな噂本当だとは思つてないけど……ほら、ね？」

続いて口を開いたのは金髪の少女。隣の女生徒も、うんうんと激しく首を振つていた。

「確か二日前、クラブ長は『核心的な証拠を見つけた！ 行つてくる！』とか言い残して消えた。そして、昨日から音沙汰なし……その日にいなくなつたと考えるのが妥当」「……そう、だよな」

4人の中に、『もう止めよう』という雰囲気が溢れ出した始めたときだつた。

——扉が勢い良く開かれた。突然入ってきた新鮮な空氣に、そして光。

「——皆！ 見つけたよ！」

それと共に入ってきたのは、金髪を靡かせる1人の少女。その手には黒い箱のようないいのが握られていた。

「……トコ、あんた何持ってるのよそれ」

そしてその少女の到来は4人にとつては迷惑とすら言えた。諦めよう、という流れになつたいたのだ。だが、恐らくこの少女は諦めようとはしないだろう。

「それはもう、クラブ長が遺した【メッセージ】だよ！」

面倒そうに4人が視線を交差させる。端的に言つて、消えて欲しかつた。もしこれで4人の身にもなにか起きたまつたものではない。やがて、無言の意思疎通が終わる。

男子生徒の1人がゆつくりと立ち上がつた。

「よし、分かつた。原田さん、副クラブ長のアンタには申し訳ないが、俺達はここで抜けさせて貰う

「……え？」

4人がうんうんと頷くのを前に、原田トコは目を丸くする。そして絶叫した。

「え——?! なんで！ 皆！ あれだよ！ 今チヤンスなんだよ！ あのいけ好かな

い生徒会長の秘密を暴くことの出来るさ!!」

そして、これだ。見た目に反してとんでもなく性格が悪い。

この少女の行動原理は、大体が『他者を貶めたい』というものに基づいていることはクラブの中では周知の事実だった。

「……いや、でも」

「……ねえ?」

「マズい気がするんだよなあ」

「……トコちゃんは止める気ないの?」

それを聞き、むむつとトコは頬を膨らませた。外見的には可愛らしいその動作に当初はメンバーも絆されたものだったが、今では全員が何も思わず殴り飛ばす事が出来る自信があつた。性格が悪すぎる。

「ないですうーー! だつてさ! これがなにかは分からぬけど、あのクラブ長が遺した遺産なんだよ?! 絶対に会長の秘密に近付くなにかだつて!」

そして、『だから嫌なんだよ』、と男子生徒が言おうと立ち上がる。だがその言葉が放たれることはなかつた。

その理由は至極単純なもの。なにせ——

「——原田トコくんだね。そして広報クラブのメンバーの方々も……全員集まっているみたいだね。手間が省けて助かつたよ」  
——トコの後ろに笑顔で立つてゐる男の姿。それは、やけに見覚えのあるモノだつたからだ。

## 謝罪とお願ひ

「——あ、会長じゃないですか！　どうしたんですか？！　わざわざこんなところまで来て！」

トコは流れるようにくるりと振り向いた。その瞳は細められながらも全く笑つておらず、半ば会長を睨みつけているようにすら見える。

そして、それを見て慌てたのはクラブのメンバーだった。

「お、おい！」

「トコちゃん?!」

立ち上がる2人の生徒。それを手で制したのは会長だった。

「いや、いいよ。当然の反応だからね。だけど、原田くん、今回は一度抑えてくれないかい？」

「……そうですね！　私も過剰に変な反応しちゃいましたし、では会長からお話しお願ひします」

トコはゆっくりと後ろに下がりながら、ニコニコとした笑みを浮かべ続けていた。クラブのメンバーはそれを気味悪そうに見ながらも、会長の方へと視線を向ける。

そして静まり返った部室を前に会長は一息入れると話し出す。その顔は先ほどと違  
い、笑みは浮かんでなどいなかつた。

「今日は、僕の方から連絡があつてきただんだ。そう、君達も勘づいているだろうけど、ク  
ラブ長くんの事についてね」

——場に緊張が走つた。トコだけが動じてはいないうだつたが、残りのメンバーは  
凍り付いたように止まる。

1人の生徒がそれから抜け出すと、すぐに謝罪をしようと立ち上がり——そこで、会  
長がそれを押し止めるように話を続けた。

「……クラブ長くんが行方不明になつた。もちろん、君達なら気が付いていただろうが  
ね。

生徒会長として、この学園の優秀な生徒が消えたことは本当に残念に思う

『え?』という空気が一瞬辺りを包んだ。それを努めて無視して、そして会長はゆっく

りと頭を下げる。

「……なにか要因があつたんだろう。生徒会にも、そして特に生徒会長である僕にはそ  
の要因を取り除くことが出来なかつた責任がある。本当にすまなかつた」

「えつ、その、えつ?」

男子生徒が周りへ視線を向ける。それに返されるのは同じく困惑の感情だつた。

クラブの解散でも求められるのでは、と思つていたのだ。あまりの落差に対応が分からぬ。

そして、そこで動いたのはトコだつた。

「はい、承知しました。その謝罪を受け入れます……それで、会長が来たのはその原因搜査とすることですか？」

「そう言つてくれると助かるよ。それで、うん。そうだね、それもある。実は2つほどお願いがあつてね。

その1つ目。クラブ長が消えた原因に心当たりがある人は、好きなタイミングで生徒会室に来て欲しい。言いにくい事もあるかもしれないから、ここでは言わなくて大丈夫だよ」

「なるほど。それで、2つ目はなんでしょう？」

促すようにトコは視線を向ける。

「2つ目は、出来ればクラブ長が消えた事に関してあまり外で言及しないで欲しい、言うことだ。

生徒会としては、あまり不安を広げたくないと考えている。勿論強制ではなく任意だから、そこは安心して欲しい」

「……なるほど、分かりました。広報クラブとして善処します。

……それでなのですが、こちらからも1つお願ひしてもよろしいでしようか?」

「勿論だよ、なんでも言ってくれ」

向けられた笑みに、トコはそれ以上の笑顔で返す。メンバーは勝手に進んでいく話に戦々恐々していた。

「ありがとうございます。では話すに当たつてまずこちらを見て欲しいのですが……」  
「私はクラブ長が遺したものなのです。」

私達で話し合つたのですが、なにかは全く検討が付かず……恐らく情報媒体だと考えているのですが、なにかお知りでしようか?」

その言葉に会長は流れるように返した。

「君達の推測は正しいよ。それは100年程前に使われていた情報媒体だね。異能技術を活用した製品が増えた事や、純粹な技術発達によつて時代遅れになつた製品……たしかビデオテープ、だつたかな」

それを聞き、花開いたようにトコは笑つた。

「そうなのですか! ありがとうございます、私達では気が付きませんでした! それで、これが情報媒体だと言うなら、是非会長を交えて内容を確認したいのです」「なるほど、構わないよ。日程調整は後ほど行おう」

あまりにも剛速球で様々な事が決まつていく。それにメンバーが目を白黒させてい

ると、いつの間にか会長が背を向けていた。

「——では、今日はありがとうございました。僕の謝罪を受け入れてくれたこと、本当に感謝しかないとよ。

「日程などはこちらから遣いを出すから待っていてくれ。それじゃあ、また会おう」  
「はい、ありがとうございました！」

笑顔で会長が消えるまで見送るトコ。メンバーが固まっていると、やがてふう、とトコは椅子へ座り込んだ。

「……おい。どういうことなんだよ」

「……あの白々しい会長さんは、どうやら『噂』を広めたがっているつてことと、それをこっちが受け入れざるを得なくなつたつてこと」

トコの回答に再び皆が停止していると、トコは勢い良く叫び出した。

「——あー！　もう!!　このビデオテープの同時視聴も受け入れられたつてことは、多分今回クラブ長はなんつつにも出来てない!!　もう、もうっ！　全部振り出しだよ！」

トコの叫び声だけが、部室内に虚しく反響していた。